

04
522

關取千両幟脚本
一之卷

088626-000-9

特52-597

關取千両幟 1の巻

近松 半二/原著

M27

DBJ-0285





關取手阿幡脚本一の巻

故

近松半二、原作
岡野美春、補綴

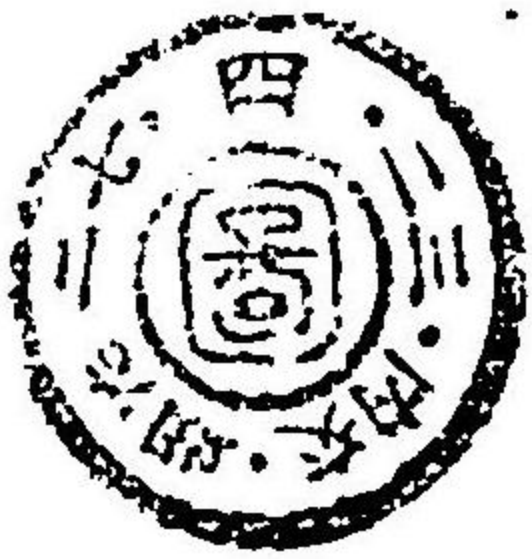
北野屋七兵衛

見物人太兵衛

鐵ヶ嶽陀太右衛門

大阪屋使一人

呼使一人



本舞臺平舞臺上手折回し障子家体正面鼠壁次は納戸口暖簾、掛け例の處に門口のり下手米俵酒樽等の積物羽織脇差の贈びらの書割總て猪名川仮住居の体幕の内より北野屋七兵衛太兵衛の兩人の積物を見て居る此みへよろしく鳴物にて慕わく

七 「扱積だのく見事じやあア何じや羽織脇差米もありえらいはすみじやの

太 「イヤ又二三年こつちの相撲よめつたよ負た事のない猪名川シタガ今度の相

撲よの千田川が病氣ゆへもつむまいと思ふたらおもひの外きついはづみ

七 「ソリヤ其等の勸進元の良のよし江戸方九州方變らす登り猪名川といふ最

負の強い力の強いあんを男をもの顔が見たい ト表より内を覗く

此時納戸の内より女房音羽出来り出合頭よにつこり笑ひ

音 「チ、是のく島の内の七兵衛さんようお出お連の衆もサアくこへ

七 「扱マアきついえづみやう千田川が出ぬもへどもあらふと思ふたが近年の大

入今日の大方ふの關取がどら、やるであらふと思ふて見物よ來たついで

ながら一寸悦びに寄ましたカ關取いもう往てかへ

音 「イエくきふの叶ぬ用事よつきつひ近處まで出られましたもう戻つてで

ござんせうマア日外のかい御世話で練物を緩りと見物致しまして忝ふ御

座り升いつでも島の内の祭りの俄が多ふて賑やか事なしたしらに在所者も

七 へ物見高いところの人よ呵られ升

七 「イヤモこちらの方も門がざわつく斗で奉公人がいごかぬの肝心の商ひが少

ないヤ斯いふ中よ廻をつら這入れまい關取よよいやうよ頼三升

「チ、せのしないマア御緩りとささりませぬ

七 太 「イヤ遅いとい場がござりませぬ

七 「左様なればお暇致し升 ト七太の兩人の門口へ出て

「サア行ませう ト連立下手へ這入る向ふより猪名川鐵ヶ嶽と打連れ出

來り直ぐ本舞臺へ行き門口をあけ

猪 「女房共今戻つた ト猪鐵の兩人のよき處に住ふ

音 「チ、こちらの入戻らしやんしたか陀太右衛門様ようお出初日からまだお目よ

掛りませぬがきついでんす見物の足が早さよそろく行ふと出掛た道で猪名

鐵 「ソリヤもう互ひでござんす見物の足が早さよそろく行ふと出掛た道で猪名

川よ達たによつてうれでちよつと寄ました

音 「夫のくようふそお出シタがまだやつと今の先櫓太鼓を打出しましたマア

猪 緩りとお茶なりと ト茶を汲で持出る

「コリヤ女房共留守の内へ今日の角刀割はこなんたか

音猪鐵

「イエ〜まだ何にも持つて」

「ハテ埒の明ぬ今迄しれぬ何ぞもめでも有かいの陀太右衛門

「サアおれも初日に鈍な相撲を取つたによつて何でも今日のこと思ふて居るか
誰と合てか相人によつてのこんたんも工夫もして見にやあらぬいつと聞に
やらふかい

音

「ハテまアようごんす其内に持てこふ幸ひ貰ふと看もあり主と一所に飯あが
つて行きやしやんせドレ拵へやうわいさア
ト音羽の納戸へ這る下手

より大阪屋の使出來り

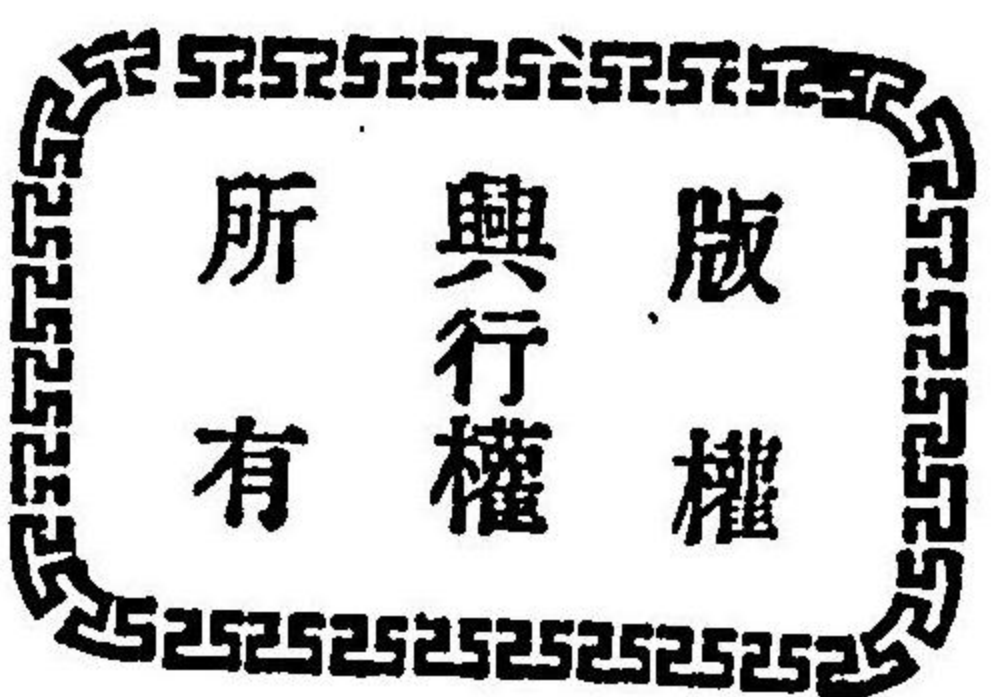
使

「猪名川様のお宿は御座り升か新町の大阪屋から参り升た佐右衛門申升錦太
夫が身受の跡金今日中に遣されませらとこちらに身受の客衆が御座り升ゆ
へ其方へ相談致しますお前のお顔を立まして今日中の待まらぬすにあつた
らこちらへ太夫をやります程は其時意地苦地のないやうに念を入れいと申
されました
トいひ捨下手へ這入る

關取千両幟脚本一の巻終

明治廿七年四月十五日印刷
同廿七年四月廿一日發行

(定價六錢)



兼發行者 岡野美春
大阪府西成郡曾根崎村番外十八番屋敷

印刷者 南谷新七
同市南區饅谷西之町二百五十三番屋敷

